

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370687

研究課題名(和文) 英語コミュニケーション活動における相互行為と協同的な学習過程に関する研究

研究課題名(英文) A Study of interactive actions and cooperative learning process in communicative activities in English

研究代表者

大場 浩正 (Ohba, Hiromasa)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：10265069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本人学習者が協同的な学習における他者との相互作用(ピア・フィードバック)を通して英語のスピーキングとライティング能力を向上させ、新たに獲得した語や文法を実際に使用できるようになる相互行為の過程において、どのようなメカニズムが働いているかを質的分析によって解明することである。結果として、協同的学習グループでは、学習の関連する主体的・対話的な話し合いが多く、深い学びに繋がっていたようである。また、非学習関連会話も少なかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate how interactions (peer feedback) in cooperative learning (CL) facilitate Japanese EFL learners' speaking and writing abilities and what learning mechanism is involved in deepening their knowledge in order to speak and write in English. To this end, this study used a framework of "constructive interaction" (i.e., cognitive activity that occurs when each person repeats the activity where s/he becomes a speaker and attempts to deepen an individual thought, and then becomes a listener and extends its range of adaptation). It is based on the "social constructionism of knowledge", as proposed by Miyake (2012) with regard to cooperative learning. As a result of the protocol analysis of the learners' L1-based cooperative and constructive interactions as group discourse during peer feedback on what they noticed, it was found that CL-based learning groups had deeper active interaction than traditional learning groups.

研究分野：英語教育学

キーワード：協同学習 相互行為 建設的相互作用 英語スピーキング 英語ライティング ピア・フィードバック

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二言語習得理論におけるインタラクション仮説 (Long, 1983, 1996) によると、第二言語の発達にはインタラクションが必要不可欠である。なぜなら、インタラクションにおける意味交渉は、学習者に「理解可能なインプット」(Krashen, 1982, 1985)、「理解可能なアウトプット」(Swain, 1995, 2005)及び「フィードバック」を保証し、第二言語の発達を促進するからである。特に、アウトプットの効果として、(1) 学習者が言いたいことと第二言語では言えないことのギャップに「気づく」こと、および、(2) 自分の言語表現が目標言語と異なっているというギャップに「気づく」ことが挙げられる。しかしながら、このようなギャップに気づくだけでは不十分であり、気づいたギャップを実際に埋める機会(学習による理解)と埋めたギャップを活かす機会(活動の繰り返し)を学習者に与えることが必要不可欠である。

一方、協同学習によって養われる人間関係、コミュニケーションの技能及び社会的対人技能は、協力してペアやグループ学習に取り組む上で必須であり、様々な言語活動を活性化させ、かつ豊かな活動に高める要因になる。特に、協同学習の基本的構成要素である「互恵的協力関係」「対面的・積極的相互作用」「個人の責任」「小集団での対人的技能」(Johnson, Johnson & Holubec, 2002)および「参加の平等性」「活動の同時性」(Kagan & Kagan, 2009)はコミュニケーションを成立させる上で重要な要素である。更に、協同学習による「振り返り活動」を通して、学習者は気づいたギャップを埋める機会が与えられる。このように、第二言語の発達に必要なインタラクションを活発にし、第二言語(外国語)学習者の中間言語と目標言語のギャップを埋めるためには、タスク活動に協同学習の原理と手法を取り入れることが非常に効果的である。

上記の理論的背景に基づき、大学生を対象に、英語スピーキングのタスク(絵の間違い探し: 双方向型インフォメーション・ギャップ・タスク)活動と英語プロセス・ライティング活動を通して、学習者の「英語学習に対する意欲や態度」がどのように変化するかを調査してきた。協同学習の基本的構成要素を取り入れた「協同的学習グループ」とそのような構成要素を含まない「伝統的学習グループ」を比較検討した結果、「協同的学習グループ」の方が、社会的対人技能や英語学習への意欲や態度、さらには人間関係において「伝統的学習グループ」に優っていることが明らかになった。しかしながら、グループ内の活動状況や人間関係の違いが、英語能力の伸長にどのような影響を与えたのかを解明することが今後の課題として残った。

(2) これまで協同学習に基づく英語スピーキングやライティング活動における学習者の

相互行為と学習の関係を扱った研究には、Danato (1994, 2004), Aljaafreh and Lantolf (1994), Lantolf and Aljaafreh (1995), Nassaji and Swain (2000), Ohta (2000, 2001)などがあるが、いずれも相互行為自体を学習と考える社会文化的アプローチに基づいた研究であり、相互行為によって何が学ばれるか、そしてどのように学びの質が深まるのかを解明してはいない。また、Swain (2000)などによる「言語に関するエピソード (language-related episodes)」の分析の有効性に関して、言語的問題点が解決に至ったか否かに焦点が当てられているだけである。協同学習による相互行為がなぜ効果的なのか、そして、そのメカニズムはどのようなものかを解明する必要性が指摘されている (Lepper & Whitmore, 2000; Webb et al, 2006)。

この点に関して、三宅 (2000, 2012) が協同学習に関して提案している、「知識の社会的構成主義」(知識は他者との相互作用によって構築されるという考え)に基づいた「建設的相互作用」(一人ひとりが、それぞれ独自の考えを話し手になって深めたり、また、聞き手になってその適応範囲を広げたりする活動を繰り返す時に起きる認知的活動)の枠組みがメカニズムの解明の突破口になりそうである。

本研究では、筆者がこれまでの実証的研究により収集してきた、学習者の英語スピーキングとライティング活動およびその活動に関する相互行為としてのピア・フィードバック活動の膨大な音声(録音)・筆記データの分析を通して、協同的な学習過程において働いているメカニズムの解明を目指すものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの研究成果を基に、日本人学習者が協同学習における他者との相互作用を通して英語のスピーキングとライティング能力を向上させ、新たに獲得した語や文法を実際に使用できるようになる過程において、どのようなメカニズムが働いているかを質的分析によって解明することである。特に、ピア・フィードバックにおけるどのような相互行為が学習と結びついていくのかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

筆者のこれまでの研究において収集してきた、大学生による英語のスピーキングとライティング活動の音声・筆記データの分析及び各々の活動に対するグループによるピア・フィードバック活動の音声データの分析を通して研究を行う。

(1) 調査 : 協同的な英語スピーキング活動における相互行為と学習過程の解明について

基礎的データとして 調査参加者 33 名(協

同的学習グループ 16 名, 伝統的学習グループ 17 名) の英語スピーキングにおける流暢性(発話数など)・正確性(誤りのない AS-unit の割合)・複雑性(語彙的・統語的)の伸長に関する分析と考察を行う。

英語スピーキングとしてのインフォメーション・ギャップ・タスク活動(絵の間違い探し)において気づいたこと(言えなかった英語表現や文法の誤り等)に対して行ったピア・フィードバック時の相互行為を書き起こし, そのプロトコル作成する(「2 群(協同的学習グループ・伝統的学習グループ) × 5 グループ × 10 分 × 3 回のトリートメント」分のデータ)。

英語スピーキング活動におけるピア・フィードバック時の相互行為を, そのプロトコルに基づき質的に分析する。分析の視点として協同的(あるいは排他的)相互作用(人間関係や役割)と建設的相互作用(自他の認知的活動)を用いてグループ内談話を分析する。さらに, その分析結果に基づき, 後の新たなスピーキング活動におけるパフォーマンスの分析を行い, 学びの質が深まったかを考察する。

(2) 調査 : 協同的な英語ライティング活動における相互行為と学習過程の解明について

基礎的データとして 調査参加者 34 名(協同的学習グループ 17 名, 伝統的学習グループ 17 名) の英語ライティングにおける生産性(総単語数)・正確性(誤りのない AS-unit の割合)・複雑性(語彙的・統語的)の伸長に関する分析と考察を行う。

英語プロセス・ライティング活動において気づいたこと(書けなかった英語表現や文法の誤り等)に対して行ったピア・フィードバック時の相互行為を書き起こし, そのプロトコル作成する(「2 群(協同的学習グループ・伝統的学習グループ) × 5 グループ × 15 分 × 3 回のトリートメント」分のデータ)。

英語プロセス・ライティング活動におけるピア・フィードバック時の相互行為を, そのプロトコルに基づき質的に分析する。分析や考察の方法はスピーキングの場合と同じである。

4. 研究成果

(1) 調査 : 協同的な英語スピーキング活動
まず, Johnson, Johnson and Holubec (2002) による協同学習の基本的構成要素(互恵的相互依存, 目標と責任, 对人的技能への認識等)を組み込んだ「信頼に基づく協同学習」によるペア(協同適学習グループ)と単なるペア(伝統的学習グループ)の英語スピーキング活動後の英語スピーキングの「流暢さ」に関して比較検討を行った。結果と両群とも向上したが, 協同学習群のほうがより伸びた下位項目もあった (Tables 1 2, & 3 参照)。

Table 1. The total number of words

Group	Pre-test		Post-test	
	M	SD	M	SD
CL	138.06	50.66	172.31	58.36
TL	108.59	36.35	151.24	38.31

Table 2. The total number of turns

Group	Pre-test		Post-test	
	M	SD	M	SD
CL	57.75	20.53	62.06	23.65
TL	38.06	11.83	47.35	13.72

Table 3. The total number of words/turn

Group	Pre-test		Post-test	
	M	SD	M	SD
CL	2.40	0.44	2.90	0.84
TL	3.01	1.15	3.34	0.84

協同学習を取り入れた英語スピーキング活動としてのインフォメーション・ギャップ・タスク活動(絵の間違い探し)において気づいたこと(言えなかった英語表現や文法の誤り等)に対して行ったピア・フィードバック時の「相互行為」を書き起こし, そのプロトコルも作成した。協同学習グループ(実験群)の 5 グループ中 1 グループを抽出し, 4 人のピア・フィードバック時のグループ内談話プロトコルに基づき, 誰のどのような発話が後の他者の英語語彙や文法の学びを深め(建設的相互作用), 後のスピーチ・パフォーマンスに具現化されたかを分析した。結果として以下のような「協同的な「相互行為」が随所に観察された。

B : *Torano-no muki.* (Direcrion of tiger.)

Mamu : *Muki* (Direction), toward.

B : Toward, toward.

Mamu : Toward.

B : *Muki. Itiou sirabete mirukedo. Tabun,* toward. *Aa,* direction, direction, *houkou.* (Direction. I will look up it, anyway. Probably, toward. Oh, direction, direction, direction.)

Mamu : direction *da.* (It's direction.)

A : *Jyaa* (Well), direction of tiger.

B : Tiger.

C : *Jyaa* (Well), direction of tiger.

(2) 調査 : 協同的な英語ライティング活動

まず, 協同学習グループ(実験群)の英語ライティング能力(流暢性, 正確性, 複雑性および全体的な評価)が, 伝統的学習グループ(統制群)と比べて違いがあるのか, さらに, トリートメント後の自己評価において両群に違いがあるのかを分析した。トリートメントとして, 2 回の授業である 1 つのテーマについての英作文を 4 人グループのピア・レビューを通して書いた(6 週にわたり 3 つの英作文を作成)。協同学習グループでは, Johnson, Johnson and Holubec (2002) の協同学習の基本的構成要素を組み込んだが, 伝統的学習グループには「協調の技能」等, 小集団

対人技能の指導はなく、また目標設定と振り返りにおけるシェアリングも設定しなかった。トリートメントの効果を検証するために6回の活動の前後にライティング・テストとアンケートを行った。

結果として、流暢性は、協同学習グループの方が伸びる傾向があった。しかしながら、正確性と複雑性に関しては、両グループに大きな差はなかった。流暢性を伸ばそうとした結果、正確性と複雑性が伸びなかったのではないか。全体的な評価(内容、構成、語彙等)では、協同学習グループの方が伝統的学習グループより評価が高い傾向があった。

また、トリートメント後の自己評価における自由記述をテキスト・マイニング(キーワードの頻度)によって分析した結果、「英語ライティング能力に関して」と「ライティング活動(下書きと清書)に関して」は両群に大きな違いはないが、「目標設定、振り返り、アイデアマップに関して」「ピア・レビュー(学び合い)に関して」「授業全体と授業以外に関して」においては協同学習グループの方が効果的であったことを示す語の頻度が高かった。

更に、協同学習を取り入れた英語プロセス・ライティング活動において気づいたこと(書けなかった英語表現や文法の誤り等)に対して行ったピア・フィードバック時の「相互行為」を書き起こし、そのプロトコル作成し、質的に分析した。分析は、英語熟達度の視点からのグループ内談話及び協同的(あるいは排他的)相互作用(人間関係や役割)と建設的相互作用(自他の認知的活動)を用いたグループ内談話において行われた。結果として、伝統的グループでは沈黙の時間が多いため全体の対話量も少なく、また、お互いの英作文のフィードバックに関係のない対話が続いたりしていた。協同的学習グループでは、学習の関連する深い話し合いが多く、非学習関連会話が少なかった。例えば、両群で平均的な正確性に違いは見られなかった(伸長もなし)が、個々に見ると、協同学習群において、正確性が伸びた学習者(2名)と変わりがなかった学習者(2名)では、相互作用に差が見られた(深い学習関連の話が多かった)。このように、協同的学習グループにおいては、伝統的学習グループよりも建設的相互作用がより多く観察された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

大場浩正, 英語スピーキング指導における協同学習の効果について—英語学習意欲と協同的活動への認識に関して—, 英語授業研究会紀要第22号, 2013, 査読有, 17-31

大場浩正, 協同学習に基づく英語コミュ

ニケーション活動が英語学習意欲や態度に及ぼす影響: テキストマイニングによる分析, 上越教育大学研究紀要第34号, 2015, 査読無, 177-186

大場浩正, 大学での信頼関係に基づく協同学習, 英語教育(大修館書店)1月号, 2016, 査読無, 24-25

[学会発表](計15件)

大場浩正, 協同学習を取り入れた英語授業, 中部地区英語教育学会第43回富山大会, 富山大学, 2013年6月29日

大場浩正, 協同学習を取り入れた英語プロセス・ライティング指導の効果, 全国英語教育学会第39回北海道大会, 北星学園大学, 2013年8月10日, (札幌市)

大場浩正, 英語プロセス・ライティングに協同学習を取り入れた効果: 英語学習意欲に焦点を当てて, 大学英語教育学会(JACET)第51回国際大会, 京都大学, 2013年8月30日

大場浩正, 協同学習を取り入れた英語授業, 中部地区英語教育学会第44回山梨大会, 山梨大学, 2014年6月21日

大場浩正, 協同学習に基づく英語授業の可能性と課題: 大学におけるピア・フィードバックの実践から, 全国英語教育学会第40回徳島大会, 2014年8月9日, 徳島大学(徳島市)

大場浩正, 英語で進める英語授業を通して, どのような生徒を育てるか: 協同学習による『自他共栄のこころ』を育てる英語授業, 英語授業研究会第26回全国大会, 神奈川大学, 2014年8月16日

大場浩正, 信頼に基づく協同学習を目指して, 中部地区英語教育学会第45回和歌山大会, 和歌山大学, 2015年6月27日

大場浩正, 英語プロセス・ライティングのピア・フィードバックにおける相互作用と協同的な学びについて, 全国英語教育学会第41回徳島大会, 熊本学園大学, 2015年8月22日

Ohba, Hiromasa, Cooperative Learning Changes University English Education in the Globalizing Japan, The 55th International Conference of Japan Association of College English Teaching, Kagoshima University, Japan, August 29, 2015

Ohba, Hiromasa, Co-constructing Knowledge for Enhancing L2 English Writing Skills: Building on Cooperative Learning, International Association of Study for Cooperation in Education (IASCE) 2015, University College Lillebaelt Odense, Denmark, October, 1, 2015

大場浩正, アクティブラーニングとしての「信頼に基づく協同学習」, 第10回公開講演&シンポジウム「アクティブ・ラーニングを深化させる教育カウンセリング-アクティブな授業づくりへの貢献を問う

- 」, 日本教育カウンセリング学会, 早稲田大学, 2016年5月22日

大場浩正, アクティブ・ラーニングによる統合的な英語の活動 - 「信頼に基づく協同学習」を用いて -, 中部地区英語教育学会第46回三重大会, 鈴鹿医療大学, 2016年6月25日

大場浩正, 協同学習・協働学習の現在と未来: アクティブ・ラーニングの活性化に向けて - 信頼に基づく協同学習, 外国語教育メディア学会パネルディスカッション, 早稲田大学, 2016年8月9日

大場浩正, 「信頼に基づく協同学習」によるピアフィードバックが英語スピーキング能力の伸長に与える効果, 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会, 獨協大学, 2017年8月20日~21日

Ohba, Hiromasa. How effective is peer feedback in improving the speaking ability of Japanese EFL learners under cooperative learning conditions? CLaSIC 2016, National University of Singapore, December 1-3, 2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大場 浩正 (OHBA HIROMASA)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号: 10265069